クラス番号	613	担当教員名	牧　真吉
テーマ	言語以前の育ちとその後への影響、その支援を考える		
著書･論文 研究課題等	「育ちをひらく」明石書店 「自閉症スペクトラムの子どもと「通じる関係」をつくる関わり方」明石書店 乳幼児にどのような関わり方をすることで予防することができるのか、 乳幼児期の育ちに淵源を持つ子どものいろいろな問題がどのような助けによって何とかなっていくことができるのか		

ゼ ミ ナ ー ル 概 要

キーワード：乳幼児精神保健、非言語による交流、育ち、関係性、育ちを支える社会

目的、内容、方法等：子ども対は言語を扱えるようになる以前に多くの体験をして、多くの学習をしている。しかしながら、このことは意識レベルでは何もわかっていなくて、従来は無意識として扱われてきた。体験して学んでいることを知っていく。このときに母親が多く関わっているが、その母の支えが少なくなってきている。子どもは親によって育てられると考えられて、社会がこの育ちの時にいかに大きく関わっているかが忘れられ、自己責任のように思われてしまっている。その結果社会は子ども虐待という言葉を生み出し、親の責任に課してしまっている。この失敗に気がつくために、文献だけではなく、実情を見て知ることを行っていきたい。

このために、まずは言葉が生まれるまでの育ちを学ぶ。お互いに分担して読んで、説明することで理解を深めていく。その上で、いろいろな場で、おきていることを見聞きして理解を深める。現場としては、乳児院、保育所、児童養護施設、児童心理治療施設、学校などの現場からの話を聞く。

その後自分なりのテーマを決めて、調べていくこととする。乳幼児期の育ちが影響を与えていることであれば、年代については自由とする。子育ての問題までを取り扱える範囲と考える。なるべく自分自身がわかる言葉に置き換えながら考えることを旨とする。

コロナの流行のために直接現場に出かけることが難しくなりつつあり、ネットを通じて話を聞くことばかりになるかもしれないが、現場の声を聞けるようにしたい。可能ならば、合宿も行いたいが、それに代わる方法を工夫することも考えたい。

授業計画： 3 年の前期は育ちについて学ぶ。最初は指定の文献から学ぶが、順次各自が見つけるようにすることを大切にする。そして、自分の学んだことをゼミの中で伝える。夏季合宿を行い、そこで改めて自分はどんなことを知りたいのか、それは自分自身がこれまで育って(生きて)来たこととどうつながっているのだろうか、そうしたことを議論する場にする。後期は、卒業論文のことを考え始めて、それぞれがどのようなテーマで行うのか、それをいろいろな文献を探すことから初めて、調べたことを発表する形でゼミを進行する。後期の終わりぐらいまでに論文の序論が書けてしまうようにする。
4 年になってからはさらに文献の調査をして、自分の知りたいことをどのようにすると知ることができる方法論を詰めて、遅くとの夏期休暇明けには調査が終了するようにする。こうしたことをゼミ内で発表していくことで詰めていく。後期は論文の作成に重点を置き、書いている内容のチェックが中心になる。

担当教員からのメッセージ

育ちの支援をしたい人を求む

言葉が生まれてくるまでの育ちがその後に大きな影響を与えていることを知ることから始めていくが、この点を十二分に理解してから先に進みたい。「3 つ子の魂 100 まで」ということわざを確かめるに近いことを行った上で、その後にどんな影響が起きているのかを知っていく。ただし、それを自ら探し出してくることを中心にしたいと考えている。与えられた課題ではなく、自らいろいろと調べたり、取り組んだりすることができる人がこのゼミに入って来る資格を持っている。尻をたたくことの下手な教員、尻をたたいてもらってやっとできる人は避けるように。子育て支援の領域で活躍するようになる人が入ってもらえるのが教員側からの要望。